

後記 雑感

本年一月五日午前八時二分、当館館員であり、同時に著名な日露交渉史家でありました高野明さんが心不全のため亡くなられました。享年五十八歳。高野さんは昭和二五年間に当館館員となられて以来三年間にわたって当館の発展に尽力されました。特に、日本有数のコレクションである当館のロシア語文献の収集・整理にあたるとともに後進の育成に努めました。

高野さんは、当館所蔵のロシア語文献の研究・紹介をはじめとして、『日本とロシア』（紀伊国屋新書）、『ゴンチャロフ日本渡航記』（新興国叢書）等の著書により我が国の日露交渉史研究に多大な貢献をされました。本誌にも、「館蔵二葉亭四迷旧蔵露文獻目録並解題（坪内雄蔵氏寄贈記念図書）」（2号）、「大黒屋光太夫遺物『露国国民学校用算術入門書』をめぐって」（3号）、「ロシア・ソビエトの日本研究について、IVソビエトにおける漂流民写本の研究」（5号）、「フヴォストフ文書考」（6号）、「ソビエト科学アカデミー版『日本書誌』解題」（7号）という5編の研究・紹介を寄せられ、大

黒屋光太夫を始めとする漂流民あるいは日露交渉史について論じ、本誌の発展に貢献されました。

図書館員として、そして日露交渉史家としての高野さんの足跡は、当館ばかりでなく本学全体の貴重な遺産となることは疑いありません。高野さんの指導のもとに育った我々にとって、高野さんの遺志を継ぎ発展させることは義務であると考えます。謹しんでここに御冥福をお祈りいたします。（紀要編集委員会）

総合学術情報センターの中核となる新中央図書館作りは、昨年暮の百周年審議会の討議を終えて、漸く軌道に乗った感じである。建物作りは、困難な作業を控えてはいるが、これで正式にスタートしたといえるであらう。

いうまでもなく、図書館作りは建物作りに尽きるものではなく、資料収集および各種のソフト作りの総合であらう。各種ソフトのうち今迄の図書館界でないがしろにされて来たと思われるものに組織がある。組織とは、複数の人が一つの目標に向って行動し、その目標を達成するための不可欠のソフトであらう。しかし、図書館の目標は果して一つなのであらうか。特に、総合大学の図書館や公共

図書館の場合には、サービス対象およびサービスの質が千差万別であらう。これからの新しい図書館作りを考える場合には、従来のような単純な組織ではなく、図書館本来の仕事をして行く上でより効果的な組織とは何かを、図書館の機能の面から考え直す必要があるように思う。（山本信男）

（二五〇ページにつづく）

早稲田大学図書館紀要 第26号

昭和六十一年三月二十五日 発行

編集 早稲田大学図書館紀要編集委員会

発行人 矢 澤 西 二

印刷所 早稲田大学印刷所
発行所 早稲田大学図書館

東京都新宿区西早稲田一ノ六〇一

(後記雑感・つづき)

この一年、図書館は新中央図書館の建設に向けての議論と目録システムの運用のことやかつてない激動の季節をくぐり抜けてきた。とりわけコンピュータの利用は、社会的必然性を含みつつも、期待と不安が交錯する中でスタートした訳であるが、端末を使う現場の皆さんの努力のお陰でほぼ軌道に乗ってきた感がある。あらゆる文明の利器がそうであるように、現代文明を象徴するコンピュータもその利用の仕方次第で人間的にも、非人間的にもなるものであるが、図書館という環境下での利用は、最も人間的に利用しうる方法のひとつではないだろうか。

コンピュータという物を手段としてどう使うかという知恵をしっかりと持っていれば、そこから得られる便益は計り知れないものがある。そして、知恵にコントロールされた手段としてのコンピュータとすべからぬ図書資料を備えられるならば、それは理想の図書館を実現化しているものと思う。

そのすぐれた図書資料の収集と利用のために、この紀要が果たす場の役割は少なからぬものがあるといえよう。今後と

も紀要の内容をより充実したものとしていくために、微力ながらも努力してゆきたい。

(北風貴紫)

この一年は図書館業務の様変りにより、目まぐるしいばかりの早さで過ぎ去って行った。きのう緑であった蔦の葉が、きょうは葉を落とし、あすは再び緑にかえることだろう、そのくらしい時間の感覚である。こういう環境の中で自分を見失うことなく日々を過ごしてゆくことの困難さを改めて思う。

この多忙な中にもかかわらず、研究成果を、あるいは業務と関連したことどもをまとめている諸先輩には頭が下がる思いである。

業務形態がどう変わろうとも、図書館員に必要な第一のことは本について精通すること、少なくとも精通しようと努力することであろうことは変わらず、むしろ一層重要なこととなってきていることは間違いない。

編集についての批判を聞き、改めてゆくべきこともあらうかと考えながら、紀要がそのための成果の発表の場であり続けてほしいと考えている。

(中西裕)

紀要第26号をお届けします。今回から

口絵で新収貴重書の紹介をすることになりました。当館でも従来から数多くの貴重書を収蔵してきましたが、それらを紹介する機会がなく、学内でもその存在を知る人は決して多くなかったと思います。今後、毎号こうした紹介を行ない、広くお知らせする予定です。乞御期待！

近年、西洋古版本と接する機会が多く、徐々に西洋書誌学に興味をもつようになりました。特に最近では、ヴェネツィアの自由人アルドー・マヌツィオのことが気になってしかたがありません。イタリア・ルネサンスを代表する印刷家、そして人文主義者、西洋書誌学では彼の存在は偉大です。自らアカデミア・アルデイナを設立、西洋古典の普及に務め、同時に印刷業に新しい地平を拓きました。彼の仕事我が国でももっと知られることを願いつつ、今後の企画を考えようと思います。

(雪嶋宏一)